



TITLE:

<雜錄>巴林と應昌

AUTHOR(S):

森, 鹿三

---

CITATION:

森, 鹿三. <雜錄>巴林と應昌. 東洋史研究 1942, 7(4): 255-256

ISSUE DATE:

1942-08-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145766>

RIGHT:

半は千百年後に私も親しく通過した所である。この縁故により大師の入唐の時その往復に如何なる道筋をとられたであらう歟。その旅行は如何に困難であつたであらう歟。當時の長安は如何なる状態であつたであらう歟。大師は長安で如何なる行動をされたであらう歟といふ風の問題を當時の記録と私自身の體驗とを土臺として御話し申したい。

とある如く支那各地を旅行された體驗を以て活寫されてゐるだけに、また却つて本遊記の脚注ともすることが出来る譯である。本遊記に寄せられた宇野博士の序文に見ゆる馬車顛覆事件なども「大師の入唐」には眼前に髣髴せしめるやうに記されてゐる。本遊記を読む人はぜひこの一文を參看せられたい。

考史遊記の出版に關與した緣故によつて、日比野編修からこの書の紹介を求められたのであるが、詳しくは本書を見られればよいのであるから、たゞ平凡な事を記して責を塞いだ次第である。實はいろんな意味でこの書の出版は私にとつて荷が勝過ぎてゐた。まづ恩師の著作であることゝ編輯校正に種々障礙があつたこと、それに書物作りは初めての經驗であつたことなど

である。やつと出版を見るに至り、今は重荷を卸してホツトした所で、念入りに紹介もできかねてゐる。他日機を得て考史遊記の注解でもかければよいと思つてゐる。

昭和十七年六月 弘文堂發行 B5判  
本文三一頁 索引三四頁 圖版二七一 挿圖四三

### 巴 林 と 應 昌

須佐嘉橋氏が昭和十三年東蒙古の各地を遍歴してその見聞を新京日々新聞に連載されてゐるが、それによると桑原、矢野兩博士が踏査されてより三十年間に於けるこれらの地の史蹟が如何に變遷したかゞ知り得られて興味深い。須佐氏のかつて拉林河畔に於て得勝陀碑を發見せられた東洋史學界の恩人である。得勝陀碑は、桑原博士の發見せられた宴臺國書碑や「考史遊記」に詳述されてゐる郎君行記碑と共に女眞語研究の貴重な資料であることは周知の事であらう。さて須佐氏の見聞録「元の史蹟を訪ねて」によると巴林の石橋に立ててあつた蒙古文の碑が昭和十二年夏の大水のために流されたりしく、須佐氏がこの地を訪ねた時には熱河土木局の人の手によつてこの碑が救出されてをり、須佐氏は之を詳しく紹介されてゐる。この碑は恐らく「考史遊記」に

巴林南北二橋の間に碑亭あり。咸豐六年建つる所の漢文及

び蒙古文の巴林橋修理碑二方を置く。俱に高さ七尺、寛さ三尺許。

とある蒙古文碑に當るのではなからうか。土木局の人達の努力でこの碑が湮滅から免れえた事は幸である。

また應昌城址には兩斷された「新建備學記」碑が桑原博士等の訪ねられた時と同じく草榛の間に放置されたまゝにあることを須佐氏の見聞録によつて知られる。たゞこの見聞録に「筆者の今迄知る限り學界の人々で此の地（應昌城）を訪

ねたことを聞かない」とあるが、須佐氏に先だつ三十年前に學界の第一人者によつて探訪されてゐるのである。桑原博士の「東蒙古紀行」が古い歴史地理誌に掲載され須佐氏の如く滿蒙史研究の専門家の眼にすら觸れにくくなつてゐたことは誠に遺憾の極みであつた。その意味からもこの度、桑原博士の支那蒙古旅行記が纏まつた單行本として見易くなつたことは學界の至幸といはねばならぬ。

（森 附記）

## 山 西 旅 行 の 收 穫

去る二十七日に、北京にもどりまして。晉南の旅はかなり期待が大きかつただけに悲觀し、晉北の旅は初めから大した希望もなかつた、それだけに荒

原で暑氣にあたり、大同へ廻ることが出来ませんでした。七月二日（小野勝年氏より日比野宛）

遠の故址や李克用の墓、さては七巖山へ行くことが出来たのはうれしいことでした。城は繁峙故城、廣武縣城、原平縣址？（今の原平附近は矢張り漢の遺跡地です）、崞の石城等。定襄には一週餘滞在しましたが、あまり新しい事實はつきとめ得ずたゞ地圖でもうまく出来れば甚だ幸です。七巖山では八路に狙撃を受け大いにあわてたです。太

惠遠の故址といふのは白仁巖寺のことで、地志によれば、代州の西北三十四里、白仁巖といふ巨石の上にあります、惠遠が創建したといはれる寺である。——惠遠は雁門樓煩の人である——明の重建にかゝり、今はたゞ乾隆の碑があるのみで他に古物はないやうに思ふ。七巖山とは定襄縣の東南にある名山で、山に七洞があるのでその名が生じたといはれる。今は代

王夫人を祀るといふ聖母祠があるが六朝から唐にかけては佛寺として祭えたといへ、六朝の造像などももの本には若干著録されてゐる。燕覺大師も、五臺山の歸途定襄縣七巖寺に泊つたことが巡禮行記にみえる。繁峙故城は、今の縣城の東にあり、北魏より隋初に至る間のもの。原平縣址は今の原平鎮の北方にある漢の故城である。崞の石城といふのは後魏の石城縣で、地志によると今日の崞縣治が即ちそれであると記してゐるが、或はまた別にその故址があるのであらう。

（日比野附記）